

(2) 秋まき小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照の気象条件で多発しやすい。令和3年は全道的に6月から7月が高温多照となったため、オホーツクの一部地域、空知および上川地方で多発した。道内で作付けされている秋まき小麦の主力品種「きたほなみ」の本病に対する抵抗性は”やや強”であるが、近年本品種においても発生が目立つようになっており、抵抗性”弱”品種に準じた防除が必要である。

本病に対する抵抗性が”弱”相当と考えられた「ホクシン」で実施された試験では、特に上位2葉の病斑面積率と収量の高い相関が認められ、被害許容水準（開花始における止葉の病葉率 25%、乳期の止葉の被害面積率 5%）が示されている。被害許容水準以下にするためには、止葉抽出から穂ばらみ期に1回、開花始に1回（赤かび病との同時防除が可能）の薬剤散布が必要である。上位葉で発病が認められてからの防除では十分な効果が得られないことから、初期の防除時期を逸しないように注意する。

また、「ゆめちから」においては、これまでに減収するような発病は確認されておらず、直ちに本病に対する防除を検討するような状況ではないが、過去に巡回調査や試験場において上位葉の発病が認められた事例もあるため、ほ場観察に努める。



写真 葉の症状(中央農試 小澤 原図)